

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第1回)

イギリス人のしゃべり方

初めてイギリスへ行った時のこと。30年ほど前、サッチャー政権末期の頃のこと、名物2階建てバスにはまだ車掌が乗っているのが普通だった。停留所にはっきりした路線図もなく、「次は〇〇です」といったアナウンスもないので、自分の目当てのバスに乗れたのかどうか確信が持てない。乗るときに「このバス、マーブル・アーチ、通りますか？」と車掌に聞いたところ、「アイ・ホープ・ソー」という返事が返ってきた。ああ、イギリスだなあ、と思った瞬間である。

シェイクスピア学者の父親の影響を受けて英文学を学んだものの、標準的な日本の英語教育しか受けてこなかった僕には、この車掌の一言は鮮烈だった。教科書通りの英語では「イエス」か「ノー」で答えなければならないはずだ。それを「通ってほしいよね」とは。これがイギリスの「センス・オブ・ヒューモア」というやつなのだろう。

その後、何度かイギリスに行く機会も増え、イギリス人と付き合うようになってみると、これが普通のイギリス人のしゃべり方だとわかってきた。ハンガリーからイギリスに帰化したユーモア作家G.Mikesに「イギリス人は嘘は言わない。だが、本当のことを言おうなどは夢にも思っていない」という言葉がある。なるほど、何事も「イエス／ノー」をはっきりさせるアメリカ英語とは対象的なわけだ。ちょうどラグビーとアメリカンフットボールのパスの出し方の違いのように。ちなみにMikesは、自分の姓は「マイクス」ではな

く「ミケシュ」であり、「me cash」（私に現金を）と発音してくれればいい、と言っている。帰化してすっかりイギリス人になったようだ。

「mind」という単語を使った「～しても構いませんか？」という質問に「イエス」と答えたら「構う」ことになるので「ダメ」の意味、と頭ではわかっていたが、実際にはどうなのだろう。ために、「ここ、座っても構いませんか？」と劇場前のベンチにいた初老の紳士に聞いてみた。イエスカノーか。その答えは「It's open to everybody.（誰にでも開かれているよ）」だった。なるほど。

その20年後、たまたまロンドンで過ごしているときに、地下鉄とバスに対する同時多発爆弾テロが起こった。屋根を吹き飛ばされた2階建てバスの写真も事件の象徴のように扱われている。かつての車掌の「アイ・ホープ・ソー」の一言が単なるユーモアを超えて耳に響いてきた。



1962年東京生まれ。早稲田大学大学院博士課程、ロンドン大学大学院修士課程修了。専門は現代イギリス小説、現代英米演劇。翻訳論。96年度湯浅芳子賞受賞（翻訳・脚色部門）。主な戯曲の翻訳に『GHETTO／ゲットー』『ニユルンベルク裁判』『コペンハーゲン』『ウーマン・イン・ブラック』など。共著『ロレンス文学鑑賞辞典』、共訳書『エミリーへの手紙』『ピーン』など。